

# 戦国軍記『桔梗原合戦記』解題

矢代和夫

本書は天文二十二年（一五五三）五月、小笠原長時と武田信玄の桔梗原の合戦を記す。【書名】桔梗原合戦記 合戦の場がそのまま書名となっている。

【諸本】〔写本〕温古堂丸山文庫（県立長野図書館蔵）・〔落原拾葉〕（続編巻十九）

【刊本】〔翻刻〕『落原拾葉』（上巻二輯・昭和五〇・名著出版）

【成立】不詳なるも「束間の神主林氏の手記なるか」（刊本『落原拾葉』解題による）。

【内容】刊本の冒頭は「甲陽ト信州ノ合戦ノ始ヲ畧」とあり長時の筑摩郡の林の館での出生から始められている。丸山文庫本の冒頭は、建武二年八月十四日、小笠原治部大輔貞宗信濃国守護職となり一国を治めた旨から説き起す。刊本は小笠原氏の沿革を省略したわけ

だが、それは七丁（一丁は十行詰）分に相当する。また、刊本の初め三十五頁には、天文十二年に、諏訪頼茂降参しその後信玄のため害された旨が記され「右クハシクハ甲陽軍鑑ニ有リ」と注されるが、その注は丸山文庫本にはない。従って刊本の『甲陽軍鑑』云々について「此一葉ハ同塵齋ノ書加ヘシ處」という点もちろん指摘はない。『甲陽軍鑑』品第廿四に当該箇所が記載されているが、明暦本では「天文十三年」のこととして、明校注者の服部治則氏は「諏訪頼重が晴信に捕えられ、甲府で切腹させられたのは天文十一年」と指摘されている。また、刊本が、將軍足利義輝の没落を記した後、小笠原貞慶が木沢の正麟寺を建立したこと、小笠原長時が来鳳正麟大居士と号したこと等を以て大尾とし

「束間神主林氏ノ兄ナリノ同塵齋」の署名で終わるのに対し、丸山文庫本は、同塵齋の署名は勿論ないが、更にその後九丁に及ぶ記事が続く。そこには、筑摩郡深瀬城が永正元年に初めて築かれたこと、林の城が山城であることから始めて『甲陽軍鑑全集』（巻十）の「桔梗原合戦長時敗軍の事 付川中嶋城取并小室の事」の章段、つまり「天廿二癸丑年五月六日信州桔梗原におゐて小笠原長時衆三千余騎出て」合戦に及んだ次第が引用されている。（『甲陽軍鑑全集』とは別称「信玄全集」である）以下略す。刊本『落原拾葉』所収本は同塵齋の注とともに、丸山文庫本と比べたとき、その冒頭七丁と末九丁の部分を持たない点で、注意しなければならない本である。天文廿二年五月七日に始まる武田との退陣

に及ぶ桔梗原の合戦が主要な内容だが、それは、①武田信玄方の軍勢の名寄各種、三百五十近くの武将が列挙され、総勢二万余騎押し出す〔視点点は武田方〕。②小笠原長時の本陣、深瀬の城、放光寺の城、林の城、井川城……深瀬方惣人数八千余騎。先手、旗本以下名寄百八十余人が列挙される〔視点点は小笠原方〕。③西牧美濃、三村肥前入道父子等の武田方に通じた逆心〔視点、同〕。④「時ニ天文廿二年五月七日早天ニ小笠原方ニモ備ヲ立テ待掛タリ」云々に始まり、部分的には「甲陽軍鑑」(品第卅一)と文言の近似したところもある。それは、武田に負けたときの小笠原長時の言葉で、武田と小笠原、両家の祖は兄弟であり、小笠原は弟なれども都に出て將軍家の師範である。いま、長時の代になり武田の旗下になることは末代の恥辱だと信玄の和談を断り「伊奈郡下条へ浪人」(「甲陽軍鑑」は「上方へ牢人也」となった云々という条である。⑤末尾は丸山文庫本も同じであるが「是ヲ世ニ野々宮合戦トイフ委ハ野々宮軍記ト云書ニ見ユ」で結ばれる。因みにその名の軍記は未見(視点は小笠原方)。⑥やはり「天文廿二年五月七日早天ニ軍始リ」で筆を起す信玄の深瀬城攻めから甲府への帰陣、桔梗原

合戦の軍功ある者への報償等々(視点は武田方)。⑦長時が天文廿〇年(□の字は丸山文庫本・刊本とも欠)將軍義輝の弓馬法式の御師範となり、摂州高安郡三日領に於いて三百貫文を与えられたが、松永弾正久秀等が謀叛し室町御殿を焼き將軍義輝を殺すに及び、是非に及ばず摂州を捨て、越後に避難、出羽の国境で家来に殺される。長時の辞世の歌も載る。木沢の正麟寺が貞慶の建てた寺だとなり、長時の法名と続く(視点は小笠原方)。⑧同塵斎の署名で終わる。

『信濃史料叢書』(上巻)所収『信府統記』の「信州松本城主記録」に次の如くある。小笠原長時は、永正十六年林ノ城に生まれ、天文三年林ノ城から此の松本城に移り、天文十二年五月七日、桔梗原合戦において敗北する。長時が、武田との兄弟関係が強調されながら信玄に従属することを断って浪人となった理由など、それは「甲陽軍鑑」や「桔梗原合戦記」と同様である。

〈付記〉天文年間には、甲斐の武田信玄が信濃に侵入し、小笠原、諏訪、村上の諸氏が度々の合戦に苦戦を強いられた時期である。『甲陽軍鑑』が武田信玄の活躍を集大成して存在が大きいため、その陰に隠されている感が深

いが、実は武田に平定された各氏族の「家の記録」が、写本または叢書として、所在の確認出来るものだけでもかなり残されている。なかでも『落原拾葉』(長野縣高遠町進徳図書館蔵・写本)は、多くの合戦記を収録して重要である。中村元恒(安永七年生)が郷土史に強い関心を持ち文献の蒐集校訂に力を注ぎ、居住地が古の落原の庄であったので、叢書を編んで『落原拾葉』と名づけたのである。その子元起は父の志を継ぎ『落原拾葉』続編の編集に当たり一五〇巻の編著に努めたが、完成を見ぬうちに明治十七年六十五歳で病没した。中村家の蔵書一万冊は千冊に減ったが、幸い『落原拾葉』をはじめとして郷土史料関係の蔵書が高遠町に寄付されて今日に及んでいる。その他に信濃史料叢書・伊那史料叢書・甲斐志料集成等々が刊行されている。